

桜女御は、いつもと変わらないやさしい笑顔でむかえてくれた。那珂姫はかしまって挨拶を返す。

「父上に追い出されてしまいました。おじゃまいたします」

「皇后様の女房が那珂姫にこわい目にあわされたとか」

「あら、やっぱりばれていきますか」

「ええ、それはもう、大変な評判」

そう言いながらも、桜女御はなんだかうれしそうだ。那珂姫もつられて笑顔になる。

「見通しが甘いのは、やっぱり父上だけです。私の行状の悪さをごまかせるなんて、だれも考えていないようです。友だちの尚侍ななしのかみからもさっそく手紙をもらいました。皇后様の鼻をあかすとはよくなされたこと、と」

尚侍は、帝に仕える女官たちの長で、那珂姫の親友だ。

「あわや切られるところだった桜を、蛇が救ったとか」

桜女御はなおもうれしそうに言う。「蛇は水と女の守り神ですもの。そんな桜を切っては大変なわざわいになるどころでした。皇后女房たちは、姫に救われたようなものです」

どう返事をしたものか。姉上にはうわさが少し曲げられて伝わっているらしい。そう言えば姉上はまじないが大好きだった。それを知っているからこそ、皇后女房たちもある雑言を口にしたのだ。おまじないの好きな桜女御、と。

だが、姉上の上機嫌に水をさすことはない。「父上は、私のおかげで寿命が縮まるそうです。姉上によ

く言い聞かせてもらってこいと、お説教をされました。……ところで姉上、二の宮様はお元氣ですか」

桜女御の笑顔がいちだんと優しくなった。

「あなたを待ちかねていましたよ。今はお昼寝かしら」

桜女御の笑顔は妹が見ても美しい。入内した時は、大変な美人とさわがれたものだった。

そう、桜女御こそ、初野はつのが高い評価を与える理想の姫君だ。宮中に入ったのはもう十年も前、今の那珂姫より年下の時だ。二人の父の桜大臣さくらのおとどは、大貴族の常識として娘を帝に仕えさせ、自分の地位を補強した。しかも、桜女御は父上の期待にそむかず、二の宮と呼ばれる第二皇子を産んだのだ。今の皇太子はすでに元服しているが、その生母はこの世の人ではない。もしも二の宮が皇太子の次に帝になれば、桜大臣は国を思うとおりに動かせる。その時には桜女御も帝の御生母として大変な力を持つ。だが、目の前の姉上にはそんな偉そうな様子が全然ない。あくまでおだやかでやさしそう、けれどどこか気弱な影がある。

そこへ帝の到着が知らされた。

桜女御が目に見えて緊張した。女房たちも静まりかえる。入ってきた帝は、いかにも帝王にふさわしい容姿だった。すでに四十近いが、目の鋭さは若いころと変わらない。

「めずらしいことだ、この御殿がにぎやかだな」

桜女御はまっかになって、口ごもる。